

## 将棋とAIと新型コロナ

苫小牧市医師会  
勤医協苫小牧病院

まつもと  
松本 たくみ  
巧

将棋棋士の藤井聡太7冠（本稿執筆中の2023年9月現在：竜王・名人・王位・叡王・棋王・王将・棋聖）が2016年10月1日に歴代最年少の14歳2か月でプロデビューしてもうすぐまる7年となる（本稿執筆中の2023年9月現在）。プロ公式戦初戦の相手は加藤一二三（愛称ひふみん：当時76歳。77歳5か月で引退規定に基づき引退。歴代最年長）で、62歳6か月の年齢差はプロ公式戦史上最大だった。将棋棋士の世界は厳しく、満60歳を過ぎると規定の成績を維持できなければ引退となるが、当時76歳まで現役棋士でいること自体が驚きだった。この歴代最年少vs最年長の対決はおそらくこの先何十年も実現しないだろう。藤井は2017年6月までデビュー初戦から無敗の29連勝を飾り、これまた30年ぶりに最多連勝記録を塗り替えた。その年にAbema TV将棋チャンネルで企画された「炎の七番勝負」では、羽生善治をはじめとする実力者7名と対局し、中学生の藤井は6勝1敗で大きく勝ち越した。ここまでだけでも小説や映画の脚本としては出来過ぎで、あり得ないレベルと思うが、その後も藤井は史上最年少記録を次々と塗り替えた。本稿執筆現在、藤井は永瀬拓矢王座への挑戦権を獲得し、史上初の全8冠独占を目指している。羽生善治が1996年当時7タイトルしかなかった時代に7冠独占を達成してから約30年ぶりとなる。しかも一般棋戦（NHK杯 朝日杯 銀河戦 将棋日本シリーズ）も全て制して史上初の一般棋戦グランドスラムを達成しており、同一年度内で8大タイトルも全冠制覇するとなると、もはや人間業とは思えない。

プロ棋士がAI将棋ソフトには勝てないと認識されたのは2017年ごろで、叡王戦優勝者の佐藤天彦（当時：名人）が将棋AIソフトPonanzaに2連敗した。その後プロ棋士たちは最善手の研究にAIソフトを多用するようになった。藤井は早くからAIソフトを利用しており、超高性能のプロセッサを搭載した高額な自作パソコンを使用している。去年はプロセッサメーカーのAMD Japanが演算能力において天才的頭脳の象徴とも言える藤井聡太を起用してCMを制作し、200万円相当とも噂されるハイエンドパソコンを贈呈したことが話題になった。

2016年から2017年にかけて、竜王戦挑戦権を得ていたトップ棋士が対局中にスマートフォンを使って将棋AIソフトを不正利用した疑いをかけられるという騒動があった。調査の結果、当該棋士の潔白が

認められ名誉は回復された一方、騒動の責任をとって日本将棋連盟会長らの辞任や解任に発展し、将棋界に暗い影を落とした。ちょうどその時期に登場した藤井が空前絶後と思われる活躍を見せ将棋界の雰囲気は一新された。

その後ほどなくしてコロナ禍が訪れた。将棋は相手から獲得した駒を使えるので、手を介して相手と接触する機会は多い。対局中はマスクの上から口元に手を当てたりもするし、顔と顔の距離はしばしば将棋盤の直径ほどまでに近づく。対局時間は各棋戦に定められた持ち時間にもよるが、名人を目指す順位戦だと1人6時間、合わせて12時間で、終局は深夜に及んで日が変わることも珍しくない。対戦相手からの感染リスクもそれなりにあると思う。

規定により、新型コロナに感染した棋士は、棋戦の進行上、延期措置が困難な場合は不戦敗となる。これにより対局せずして負ける棋士が何人も現れた。健康管理も勝負のうちかもしれないが、これだけ感染力が強いと誰が感染しても不思議ではなく、運次第だ。

緊急事態宣言が出た頃は各棋戦の延期・中断が相次いだ。対局中にはマスク着用が義務付けられた。ご本人にとっては決して笑いごとではないが、集中するあまり、うっかりマスクを外したまま約1時間将棋を指し続けた元名人が対局相手から指摘された時点で反則負けとなるなどの珍事も起きた。その後、新型コロナウイルスの分類が5類へと移行する中でマスク着用は任意となった。

中学生の頃、父が友人から未完成の将棋盤（木は桂）をもらってきた。たしか厚さ6寸で、木目が綺麗だったが1か所大きな節が付いていたので商品にならなかったのだろう。天板はツルツルでマス目がなく、脚もついていなかった。

ひっくり返すと裏面の中心には四角形の窪みの中にピラミッド型の四角錐が埋め込まれたような彫りがあった。父はこれを、昔は殿様の前で対局する御前将棋というものが、反則を犯した棋士を打首にして、逆さまにした将棋盤に首を立てるために作られたものだと説明した。嘘か本当かわからないまま、天板にノコギリで81マスの彫りを入れ（職人は刀で彫る）、墨入れをして自家製の将棋盤を完成させた。脚はなし。

中学生の頃、その将棋盤でアマ初段の父と徹夜で将棋をしたことがある。何度やっても勝てず、しつこく「もう一局」としているうちに明け方になってしまった。結局勝てたのは父が居眠りを繰り返しながら対局した最後の一局だった。